

100

慕い集える若人が

寄稿文



中央図書館(駿河台校舎) 1967(昭和42)年5月竣工



聖橋校舎 1965(昭和40)年4月購入

秋田県支部元支部長・現顧問 柴田 久雄 (昭和25年卒)

私の手許に古い一通の書簡がある。封筒の表左上には三銭の切手が貼られ、「陸中盛岡、廿五年」という郵便局の消印が押捺されているが、月日までは判読できない。三銭の切手であるから、昭和35年ではなく、明治35年(1902年)の手紙であることは明らかである。封筒の裏には、差出人として、「盛岡市六日町高與旅館にて 原敬」とある。後に政友会の総裁となって内閣を組織し、大正10年(1921年)11月4日東京駅頭において、志半ばにして暴漢の凶刃に斃れた「平民宰相」原敬その人である。封筒の表の宛名は、「東京牛込区市ヶ谷砂土原町一丁目二番地 菊池武夫様 親展」とある。この菊池武夫先生は、中央大学の前身英吉利法律学校創立者の一人で(もっとも、中央大学百年史通史篇上巻95頁には、創立者については、なお検討しなければならないであろう、との記載がある)、後に東京法学院大学の初代学長となり、同大学が中央大学と改称した際も、引続きその初代学長に就任している。菊池武夫先生、原敬氏のお二人とも南部藩士の家柄で、菊池武夫先生が嘉永7年(1854年)生れ、原敬氏が安政3年(1856年)生れであるから、菊池武夫先生の方が2年先輩のようである。菊池家は、代々南部藩において勘定奉行を勤めていた名家で、南北朝時代に九州肥後を本拠地として活躍した豪族菊池氏の出といわれ、それが故か、菊池武夫先生を始め名前に「武」の一字を冠した人が多い。現に、菊池武夫先生

直系の曾孫も「武範」「武篤」さんである。

話を本題に戻そう。封筒の中には、幅約18センチ、長さ約77センチの巻紙(和紙)に、毛筆をもって記載された手紙が入っている。実に達筆であり、行文流麗という賛辞が相應しい。毛筆に不慣れな私でも、原敬氏が選挙に立候補したので、菊池武夫先生に是非応援して欲しいという依頼状であることぐらひは判明したが、「てにをは」まではなかなか判読し難い。そこで、中央大学の大学史編纂課の中川寿之氏に書簡の写しをお送りしたところ、中央大学百年編集ニュース34号に、全文の訳文を掲載して頂いたので、それをお借りすることにする。

「拜啓益々御多祥奉賀候 過日大阪より
 歸京之際参上可仕考之処 僅二日間之
 滞京乍忽御無音仕候段御海容奉願
 上候 扱選挙之方も追々切迫いたし有
 志者一同尽力最中 予之大勢多分宜し
 かるべしと存候 其モハヤ余日も無之
 兼而御内諾被下候通御尽力ヲ仰キ候
 ハ此際ト存候ニ付 モシ御差繰出来候ハ
 何卒御歸省御添慮被成下度一寸ニも
 老閣之御歸省ハ甚大効力可有之ト存候
 ニ付 深ク御依頼仕候取急キ右要旨のみ
 申上候 勿々頓首
 七月二十日 敬 菊池老閣 侍史」
 (学员 柴田久雄記)

秋田県支部元支部長・現顧問 金野 和子 (昭和29年卒)

この度は、中央大学学員会秋田県支部創立100周年記念という大変記念すべき機会に感謝状や記念品をいただき恐縮しております。私の支部長時代は、田口昭一名幹事長のお蔭で過ささせていただいたといっても過言ではありません。有難うございました。

私共夫婦は、昭和40年東京から秋田に移住し、東京弁護士会から秋田弁護士会に入りましたが、その頃の事をふり返ると、たしか当時学員会秋田県支部の支部長をなさっていた弁護士の故木村一郎先生から公私にわたり御親切なお心使いをいただいたことが思い出されます。そのようなことを思い出すと、私は支部長として後輩の方々に何が出来ただろうかと忸怩たる思いが致します。

もう一つ学員会の御縁としては、「学員時報」の「中央俳壇」がありました。「中央俳壇」は、現在も弁護士の市橋千鶴子先生(俳号千翔)が選者となり続いておりますが、私の手許には平成8年発刊の「中央俳壇合同句集」があり、その中には私の拙句も入れさせていただいています。市橋先生は、中央大学学員会副会長として何回も秋田県支部の総会に御出席下さいましたが、中央俳句会の会長もされており、俳句初心者の私に投句をおすすめ下さり、一時期私も「中央俳壇」に投句をしておりました。当時は、俳人石原八束先生(昭和18年・中央大学法学部卒)が選者でした。その頃、「中央俳壇」に投句し、石原八束先生に採っていただいた句は、その後、石原先生がお

亡くなりになりましたので、俳句歴の浅い私にとっては、忘れられない句となりました。そしてこの句は、石原八束著「胸中山河一秀句を拾う」(飯塚書店)の中にも入れていただき「中央俳壇」に係る私の一句となりました。

梅雨寒や傍聴席に母一人 和子

須磨彌吉郎先生の思い出

秋田県支部顧問 藤原 毅 (昭和30年卒・土崎港出身)

中央大学学員会秋田県支部創立100周年記念誌の発刊に当って、私淑した郷土の大先輩須磨彌吉郎先生の思い出を記すことになりましたので、県支部に係わりのある思い出を含め、記憶を辿りながら一部を記述いたします。

須磨先生の人となりやご活躍については、西木正明著「梟の朝」や以前秋田魁新報に連載されていた逢坂剛の「遠ざかる祖国」で紹介されているが、南京総領事、外務省情報部長やスペイン公使を歴任されている。海外に知人も多く絵画をはじめ美術に造詣が深く、これらを情報収集にも活用された。また山本五十六海軍大将とも親交があり、共同で情報機能の充実に心血を注がれた。スペイン公使在任中は、スペインが世界のパノラマ的な位置にあったことから、貴重にして的確な情報が日本に送られたという。外務省は、この情報を信頼し重んじたが陸軍は殆ど採用しなかったと云われている。先生の情報に耳を傾けておられれば、多数の有能な若人の尊い命を失うこともなく、別の形の日本国が存在することになったかも知れない。

前置きが長くなりましたが、昭和26年に講話条約が締結され、須磨先生は昭和28年から二期に亘って衆議院議員としてご活躍された。衆議院議員に立候補された時のことである。学員会秋田県支部総会が開催された会場近くの路上で先生がマイクを持って街頭演説をされている音声がかつては聞こえてきた。法曹界出身の支部長は「お呼びしては。」と発言された。俄の提案に出席者は一瞬戸惑ったが、支部長は「先生は同窓生である。学生時代から愛校心の強いお方だ。本来ならば総会に出席される筈、告示期間中で

多忙と思うが時間があるようでしたらお招きしては。」と――須磨先生は、特徴のある須磨スマイルで入って来て支部長の求めに応じて「私は、ヤキチロウ・スマ、須磨彌吉郎です。」とヤキチロウ節で立候補の抱負などを雄弁に語られた。全員からの励ましの声に偉丈夫な先生の目は潤んでおられたのが印象的だった。これを機に学員の支援の輪が広がり一層の効を奏したことは申すまでもない。

須磨先生が立候補した当時は立会演説会があった。どこの会場も立錫の余地がない程の聴衆が集まった。先生はヤキチロウ節で「私は国技である相撲が大好きです。体重は25貫もあり体軀では引けをとりません。外交官として世界を経験しております。どうか皆さん私を国会という土俵で相撲を取らせてください。そして外交で外国と相撲を取らせてください。」と情熱をもって語られた。その時、聴衆の一人が「このホラ吹き、大風呂敷。」とヤジった。学生時代、辞達学会(弁論部)で各大学対抗弁論大会で優勝した雄弁家の先生は、すかさず、「風呂敷は、日本に古くから伝わる種々なものを包むことができる素晴らしい布です。私は今日本が抱える外交問題を風呂敷に包んで背負って頑張ります。どうかこの風呂敷男を国会で働かせてください。」今までヤジで喧騒の会場は満場の拍手に変わった。

以上が思い出の一端です。後年、先生は本学理事長の要職を務められ母校の隆盛にご尽力されました。昭和45年4月30日惜まれながら79歳の生涯を閉じられました。郷土の偉大な先輩を心から尊敬しております。

拙稿のご一読ありがとうございました。

秋田県支部顧問 伊藤 彊 (昭和34年卒)

昭和33年(1958年)の初夏、珍しく授業に出た神田駿河台のキャンパスで、高校で一年後輩の金子清太郎君(東京海上日動火災保険、東京調布市)が声をかけてきた。「先輩、この夏中大のブラスバンドを秋田へ連れて行ってもらえないか。」

当時、中大吹奏楽部は、関東吹奏楽コンクールで優勝するなど、日本学生界のトップに君臨し、金子君はマネージャーの重責を担っていた。例年の夏季遠征は、OBの代議士や広島など市長も多い中国や関西を回っていたらしいが、初めて東北・北海道公演を企画し、それもぜひ成功させたいという。

逆に私の方は、今風にいうとチョーに落ち込んでいた。当時中大の理事で、郷土の先輩の一人である須磨彌吉郎氏の第28回総選挙で、個人演説会の三下弁士を務めたり、中曽根康弘元総理の高崎青雲塾にあやかって、同志と共に秋田青雲塾を組織して拙い運動を重ねたものの、やんぬるかな須磨氏は衆院三選に失敗。おまけに当方は選挙違反までやらかして、這這(ほうぼう)の体で、東京に逃げ戻ったばかりだった。それがかえってプラスしたのか、金子君の頼みを二つ返事で受けてしまう。

間もなく大学から開催県の代表に召集がかかった。県出身学生会の代表である幹事長は佐藤幸治氏(元TDK、仁賀保町)。彼は甲子園を目指す秋田高で、入学早々の1年春から3年夏まで、殆ど一人でプレートを守り続けた有名左腕投手。1年下の私とは顔見知りで、言葉も交わす間柄。そろって説明会に出席して、目の前が真っ暗になってしまった。

「8月の出発前、7月下旬まで地元におられる学会支部長から公演引き受けの印鑑をもらい、分担金25万円を納入

すること」一。大学の年間授業料が1万2千円から、学生の反対運動にもかかわらず1万8千円に値上げされたばかり。親から毎月1万2千円の仕送りがあれば、賄付きの高級下宿で楽に暮せた時代。腰を抜かした二人はすぐさま帰秋し、私の父が知っていた木村一郎弁護士にお願いに上がった。先生いわく、「金は私が用立てる。今は手元がないから秋田銀行から借りる。ただし支部長のハンコは、君たちが大館へ行って中村先生からもらってきてくれ」と、捺印についてはいささかつれない様子でありました。

二人は、大館市の桂城公園向かいの中村嘉七弁護士のお屋敷に伺いし、恐る恐る話を切り出した途端、「おう、そうか」といとも簡単に捺印していただいた。歓喜した二人は、トンボ返りで秋田市に戻り木村先生にご報告をしたところ、先生は「あの中村先生がねえ」と、一瞬何ともいえぬ表情をもらされたのを今でも鮮明に頭に残る。中村先生にも傑作な思い出がある。何年かしてあきたくらぶで開催の学会支部総会が懇親会に移ろうとした矢先、「ユウゲイカセギンはまだか」とドスの効いた渋い声。「それ何ですか」とお尋ねすると、「芸者のコトだ。アッハー、ハッ」と豪快に笑い飛ばしたものだ。何の事はない、読んで字のごとしだが、芸者を遊芸稼ぎ人と呼ぶ先輩がおられることに思わず時代を錯覚してしまった。

話は本番の公演に進む。演奏会の目的は、秋田市民に中大吹奏楽の素晴らしさを鑑賞していただくことであり、福祉施設の千秋学園、感恩講保育児を招待すると同時に、利益金は秋田市社会福祉協議会に寄付すると趣意書を作成して、社福協と秋田魁新報社の後援を取り付け、魁文化欄への前触れ記事掲載までこぎ付

けた。

とはいえ、予算に広告代もない学生の仕事。プログラムの広告は駅前の酒まんじゅうの⑧鎌田などに通ってもらったが、ここで先輩の皆さんのバックアップが大きな威力を発揮した。木村先生のご配慮もあってか、幹事長の広嶋重治氏（廣島ふとん店社長）、秋田市役所の藤原毅氏らが、時間をさいては幅広い販売活動にご尽力。その縁で現在でも何かとお世話になりっ放しの次第である。

一方、現役はゲリラ作戦を展開した。骨太で知られる中大生にしては珍しく男前の赤坂光一君（秋田市議）、佐々木久雄君、川反の料亭「稲本」の跡取りである熊野隆志君らを川反横町の五丁目橋に立たせて、勤め帰りのOLにアタックした。広小路の永森館二階（現ホテルハワイ駅前店）に設けた事務所には、横手から吉田正巳氏（現土屋姓、土屋幼稚園長横手市）、湯沢からは初々しい“少年”が、自弁で毎日のように駆けつけてくれた。あんまり済まないのが公演後、国鉄の普通運賃だけ払った覚えがあるが、ケチった私は急行料金については知らん振りを決め込んだ。その一年生が、今は押しも押されぬ魁新報社の佐藤暢男社長。だからその件では今だに頭が上がりません。

ついに盛夏16日の公演がやってきた。昼はやや空席が目についたものの、夜はほぼ満員の盛況。記憶は薄れたが、延べ2,500人を超す入場者があったのではないかと。改めて金子君に電話を入れてみた。「秋田駅から市立体育館（現県庁第二庁舎）まで、黒い制服姿にゲートルを巻いてパレードした。あなたから頼まれてクワイ河マーチをやったことは、おぼろげに判るが、全て知っている男

は昨年死んでしまった」。

ここにも秘話がある。佐藤幹事長は、吹奏楽部が秋田市に入る前日、出身地の母校平沢小で昼夜2回の公演をこなしていたのだ。中大在学中から、TDKの創始者斉藤憲三代議士の事務所に出入りし私設秘書のような役割だった。彼は、きつと斉藤先生のお力にすぎたに違いないが、公演を含めそんな話はだれにも話をしたことがない。沈思黙考、決断即実行の佐藤さんのお人柄をしのぼせる話ではある。

公演を終えてからの打ち上げも楽しかった。利子まで付いて貸付金が戻った木村先生は上機嫌。「反省会をプレゼントする」と有難いお言葉をいただいたが、「それくらいは手元に残っております」とご辞退を申し上げ、高校も大学も同じである長野俊次君（元安田生命、秋田市）経営のレストランで一次会。二次会は、県内知名政財界人しか入れない南通り亀の丁のクラブ制料亭「翠山荘」に、OBともども先生の後ろについてご入場。なぜかここでも支払いはいくらも足りた。

もちろん、秋田市社福協にはそれなりのお礼をお届けしたが、稿を終えるにあたって身をつまされた。ことし佐竹氏遷都400年を盛大に祝った県都秋田市。あれから50年も経たないのに、あの時の会場の秋田市立体育館を始め、事務所、打ち上げ会場を含めて利用した施設は今もすべて失せてない。高齢で鬼籍に入られた方とはもかく、公演に携わった数多い同窓の方々は、紙面に限りがあり筆の及ばないのは失礼の限りですが、その大半は今だに元気でいらっしゃる。なのに丈夫なはずの建造物の寿命が、人間より短いというのはどうしたことか。母校県支部創立百周年にあたって改めて人の力の偉大さ、絆の深さを痛感する。

秋田県支部副支部長 高橋 祐之助 (昭和31年卒)

私は中央大学で法律を専攻した。当時は戦後復興の時代でもあり、どちらかといえば経済・商学が脚光をあびていたときであったが、ただ何の目的もなく漠然として中央大学の看板学部ということだけで法律を専攻したのであった。それが後年、私の人生と深くかかわってくる結果となり、今思えば極めてラッキーな選択であったと思っている。

私は人生の三分の二を金融機関の仕事に携わってきた。ために好むと好まざるとにかかわらず直接・間接に法律と深くかかわりをもった人生を過ごすことになった。

大学で学んだ法律は基礎的、概念的知識であり、これが実社会に実生活にどのようにかかっているかということ金融の仕事と結びつけるために、より一層の努力が必要だということを悟ったのは審査部へ配属された30才前後のことであったと記憶している。

私が法学部に入って最初に興味を持った科目は刑法総論(木村亀二 刑法読本)であった。それは終戦直後の殺伐とした時代においては法律といえば刑法が実生活に直接的にかかわっておったからで、ために必然的に刑法に目が向いたものであったようだった。

その結果法律と実生活の関係がおぼろげに知ることができ、それを通して、より巾を広げたいということから民法に入るきっかけとなった。民法は我妻民法を夢中になって勉強したような気がするが、今になって思えば“象の足を見た……”諺のたとえのようなものではなかったのかと気恥ずかしい思いで一杯である。

審査部管理課の仕事をするようになって、連日故木村一郎先生の事務所に通い、先生から訴状の下書きを教材として法

律の専門知識のなんたるかを教えていただいたことが、私にとっては大きな自信につながったと確信している。木村先生には偉大なる先輩として敬意と感謝の念を表するものである。

私は平成3年不祥事件の処理と再生のため要請を受けて現職に就任した。最初の一年は不祥事件の処理に忙殺された一年であったが、それを無事解決できたのは中央大学で培った法律に関する下地があったからだと言えながら母校の有難さが身に染みているところである。

最近は何事にもアメリカ流が浸透し、アメリカナイズされてきている。金融界でもご多分に漏れず、リレーションシップ・バンキングやコンプライアンスの指導をうけ、その実践・強化に汲々としている毎日である。

現下、我が国は政治、経済、社会、文化等すべての分野において複雑、かつ多様化しているものの、何よりも最優先に求められるものはコンプライアンス＝法倫理の遵守精神であろう。

私共、戦中・戦後派は、敗戦・復興・繁栄と時代の激変の中に身をおき、それを立派にクリヤーしてきた自負がある。

しかし、残念なことに、復興・繁栄に全エネルギーを燃焼しつくした余り、コンプライアンスのなんたるかを忘却し、次世代を担う後継者にこのことを伝えるのを怠ったのではないかと残念に思えてならない。

今こそ法の精神を次世代に声高らかに伝え、健全な社会の構築に寄与、貢献すべきではないかと考えている昨今である。

余生幾ばくもない残りの人生の全てを、コンプライアンスの実践・推進にささげたいと考えている次第である。

秋田県支部副支部長 佐藤 正 (昭和31年卒)

わが秋田県支部の会合の雰囲気は、いつも学術集団的な気風に溢れ、得ることの多い内容が厚く重なって楽しいものがある。出席してくれた学员諸氏の人格と持ち味の色濃さがそうさせてくれるのであろう。

ところで、人格や職域をとおして得られた各位の知的内容を、時には「キリッ」としたシステムに組み建て、学ぶ要求に燃え立つ若者に分け与え、共に学ぶ機会をつくってみたらどうだろうか、と思うときがある。

いま相談に来ているのは、本学法学部の通教課程で学んでいる学生会支部のみなさんからで、ともすれば細くなりがちな“学びの灯”を、人間的学問的な太い音声で、「どうした、それじゃ駄目だぞ！」という“喝”をいただきながら、灯をかき立てたい、という気持のようである。

この課程はなかなかの難関で、県内の卒業生が年によっては不在である、ということもあるらしいのである。私自身このコースで迷走を続けた者であり、諸先輩のご懇篤なご指導を是非お願いするしだいである。

法律・金融・公務・実業のあらゆる分野で活躍し研究している学员諸氏の、その素晴らしい人格や専門性を、わが学员会支部の宝物として広く静かに分け与え、現代の若いみなさんに、生きる目標を鮮烈に輝かしてもらうことは、考えてみれば私たちの本来的な役割でもあるように思うのである。

そのためにも、前記後輩の指導とともに、わが県支部恒例の学術講演の素晴らしい内容を、学内に限らず広く県民に記録をもって公開する取り組みを行い、本学の学術的気風の一端を理解していただくことが大切だと思うものである。

私の所属する白門会県南支部では県支部に学び、短い時間ながら学習講演を行ってから三年目を迎えている。

一昨年の一回目は、県支部理事の佐藤恵子氏(47商・新政酒造)を迎え、“蔵”という題で、地道な女の歩みが織りなす営みの重さを気負いのない口調で語っていただき、感銘を深くしてくれたのである。

昨年の二回目は、経済産業省から横手市産業経済部長として出向している松原浩司氏(62法)を迎え、“地域経済産業の振興について想うこと”と題し、地域民性の特性をどう活かすかなどをふくめ、示唆に富んだ内容の濃いお話を伺うことができたのである。

今年の三回目は、農事組合法人やまだアグリサービス代表理事高橋與志幸氏(46経・湯沢市酒米研究会会長)から、“農業振興の新企画・酒米栽培の現状”という題で、全国の酒造動向の分析の上に立った酒米栽培の位置づけを柱に、きびしいなかにも誇りをもって取り組む決意をふくめたお話を伺った。

いま、“学ぶ気風の具体的な確立”を強く感じた。全県学员の知恵の結集を図り、学び合いたいものである。

秋田県支部副支部長 吉田 重信 (昭和38年卒)

「青年よ、大志をいだけ」小川町の白門を、潜り抜ける。終戦から、十年、復興途上に入ったばかりの東京。見る物、聞く物、食う物、ビル街の人の群れ、都会への複雑な憧れは、全て、若き大志を掻きたてた。

多くの優れた、恩師の厚い御指導の下に、温かく力強い友情に囲まれた人間形式の基礎づくりの青春時代であった。白門生活に別れを告げようとする梅の蕾も綻び始めた頃、就職も決まり卒業の矢先、不祥事を起こした我々、丸坊主制服姿で、ジュースで乾杯の送行会が挙行された。大恩師であります今は亡き棚稿義輝先生には、大変な労苦を頂き感謝の念に堪えません。十年程の都会

生活を終え、秋田に帰省し、無我夢中で、仕事を始めた。

白門会秋田県支部との出逢いは早いもので、四十年になります。秋田ならではの、人情と友情の絆で貴重な歴史を培った白門会であります。我々会員は、学舎で得た知識と厚い友情を温めると共に地域社会への貢献を積み重ねようではありませんか。この活力源の伝統を継承し後世に受け継げ得よう願うものがあります。諸先輩の皆様には、益々御健勝で御活躍されますと共に、御交誼を賜ります事を御願い申し上げます、白門会秋田県支部百周年をお祝い申し上げます。

「月日は 百代の過客にして
行き交う年も また旅人なり」 芭蕉



昭和42年 吉田道場前



昭和45年 道場にて



昭和46年夏 花輪合宿 吉田道場にて

秋田県支部副支部長 住谷 一男 (昭和40年卒)

所得倍増計画を背景に、岩戸景気で、年率10%以上の高度経済成長が続いていた昭和36年、中央大学に入学した。

この年、秋田県では、秋田空港が開港し、秋田国体が開催された。

そして、昭和39年の第18回オリンピック東京大会(S39.10.10~24)を経て、山陽特殊鋼の倒産や山一証券への特融などのあった不況の昭和40年に卒業した。

なんとしても、秋田から脱出したいと思って、勇躍、東京へ出てみたが、いわゆる“おのぼりさん”で都会の世情に疎く、地理不案内としゃべる言葉は秋田弁であり、すべてに戸惑うばかりであった。

先輩の紹介により、四畳半、二食付8,000円で新宿区戸山町のサラリーマンの家へ下宿することになった。

ここの“おばさん”が新潟出身で、地方私の私に理解があり、東京の“いろは”について、教えてくれたので大変助かった。

さて、大学生活であるが、一生懸命、勉強したという記憶は無い。今だに記憶に残っているのは、適当にアルバイトで稼いで、青春を大いにエンジョイしたということである。

そこで、大学生活には、きっても切れない“アルバイト”の思い出を脳裏に浮かぶままに記してみたいと思う。

その1、生活費と遊興費を稼ぐためのアルバイトは、今も昔も変わらないと思うが、私は恵まれていた。小学校6年で珠算1級合格していたので、先輩の紹介で珠算塾の教師のアルバイトが直ぐ見つかった。ただし、これは月曜日から金曜日まで毎日夕方5時から7時半位まで、小学生から中学生が対象のクラス40~50名のクラスを、二クラス指導するものであった。授業内容については、問題は無かったが、時間の制約がきつかった。所謂、この時間帯は完全に拘束されてしまうことである。それゆえに3年生からは月、水、金の週3日にしてもらったが、アルバイト料は据え置きのままであった。

その2、ある時、友人と学内のアルバイト

求人掲示板を眺めていたら、映画のエキストラの募集があった。内容はよくわからないが、何を演じるのかが、興味をひいて3人で応募することとした。当日、たしか新橋の演舞場だったと思うが、朝から召集をうけ、出かけた。

そこは、「愛染かつら」の舞台で、岡田茉莉子と吉田輝雄が出演していた。我々は、観客という設定で、一日中、ただ椅子に座っているだけなのである。エキストラに慣れていると思われる人々は、本を持参して、一日中読んでいるのである。時々、観客の我々に要求されるのは、シナリオの進行に伴ってだろうと思うが、拍手を強要されるだけだった。ようやく開放されて、日当をいただいて外に出たころは、夕闇時であった。誰言うともなしに、飯を食って行こうと言うことになり、有楽町駅前の、とあるレストランに入り、カツ丼となにか食ったら、その日いただいたアルバイト料が殆んど無かった。何のためにアルバイトをしたのやらと皆で大笑いになった。

こんなことで、極めて平凡な学生生活を送っていたが、4年生の卒業試験時に父倒れるの報が入り、卒業に必要な単位数プラスアルファの科目だけを受験して秋田へ帰った。幸いなことに父は一命を取り止めたのであるが、今度は卒業ができるのか否かが気になりだした。そこで、学務課長に面会を求めて、確認することにした。卒業に必要な単位は確保できていることがわかったのだが、その時の学務課長の言葉が忘れられないものになった。いわく『中央大学の卒業予定者として就職していても、卒業していない人がいる。そういう人に対して、追試験を受けて、卒業することを再三勧めているのだが、彼らはおしなべて、社内では優秀で仕事に集中していて、試験を受ける時間がないと言ってくるので大変心配している。』どうやら、私は最後は学校に心配をかけなくても良かったみたいである。

秋田県支部理事
菅原 継昭(昭和33年卒)



このたび、中央大学学会秋田県支部が創立百周年を迎えられ、これまで支部の輝かしい歴史と運営にたずさわってこられた歴代支部長をはじめ役員各位の偉業とともに、今後の更なる発展の道しるべとなる記念誌が発刊されますことを心からお喜び申し上げます。

年に一度の総会で、同窓の諸先輩と再会できますことは、私にとって唯一の楽しみであり心待ちのときでもあります。校歌や応援歌を唱い、銘酒「新政(あらまさ)」を酌み交しながらの情報交換と友好のひと時は、健康の維持とエネルギーの浪費をすっかり忘れさせてくれます。良き同窓はよき同志であり有難いものです。

学校出てから幾年月、いまじゃ社会の粗大ゴミ、仕事も卒業し、毎日がテレビ漬け、スイッチを入れるとすぐに消され、余生もへつたくれもありやしない。あとはお迎えが来るのを待つばかり。幸せは、ささやかな故にいと淋し、ろうそく人生そのものだ。現役時代の無茶な元気が懐かしい。

デカンショを夢見て胸膨らませ、潜(くぐ)った門が白門校。田舎育ちの少年が、好奇心とは裏腹に、どう間違えたのか入ったところが華(はな)の応援団。入団当時は反省しきり、いまでは感謝の雨あられ。学徒学舎の楯となり、体を張って母校の隆盛を期す。古きよき伝統を守りながら、向学に燃える若者の勇姿。頼もしく喜ばしい限りだ。

卒業論文も至難だったが、応援団生活も軍隊並み、まさしく忍(にん)の一字の四年間だった。全日本学生応援団連盟発足以来唯一人の東北出身の応援団員と聞かされ優越感と同時によく秋田米と秋田銘酒をせびられたものだ。

現役時代の思い出数々あれど、なんといっても箱根駅伝の応援と応援団節に出会えたことだ。大阪で行われる全日本学生相撲選手権大会の会場で、耳にするのが近畿大学応援団節。曲もよし、歌詞もよし、これを参考につくられたのが中央大学応援団節だ。

〽ここはお江戸か神田の町か、神田の町なら大学は中央。大学中央の学生さんは、度胸ひとつの男だて。度胸ひとつで神田の町を……。唄の気持はどこかいつぼんどっこの唄に似ているような気がする。いい調子だ。

応援学部を卒業して以来今日まで、総会をはじめ各種大会や集会、慶事などの席上拍手を求められる機会は数えきれない。拍手は実に金のかからないすばらしい楽器だ。

銘酒に酔いしれながら、熱きエールを懇願され、いよっ！まってましたの掛声で、老骨に鞭(むち)打ってリーダーを頑張ってはみるが、なにせ年令(とし)には勝てない。気持は若い体が言うことをきかない。訓練がたりない。若い頃のツケが廻って来たのかもしれない。あの頃がうらめしい。

さて人間衰えてくると誰しもが健康でありたいと願う気持に変わりはない。年輪を重ねるにつれ人一倍健康管理には気をつけている一人だが、なかなか思うようにいかないのが現実、身心共に健康で毎日を有効に楽しく生活していきたいものだ。目が覚めて先ずこそ思え天地の、恵み豊かに生くるこの身を。

終りに、秋田県支部の益々のご隆盛と諸兄のご活躍ご発展をご祈念いたします。

中央大学に栄光あれ！

秋田県支部元幹事長・現理事 豊口 祐一 (昭和39年卒)

1. 私は、昭和54年度の中央大学学生会秋田県支部定期総会で幹事長に選任され、昭和61年度の総会で退任するまで約7年間幹事長を務めました。

私が幹事長をしていた間、総会は例年6月頃、いまは新館部分を残し取り壊されたアキタニューグランドホテルで開催しました。会費は7000円で行っていましたが、先輩諸氏からは寄付をしていただき、これでもって二次会、三次会と夜遅くまで会員の親睦、交流を深めておりました。当時の支部長は、いまは亡き阿部正一先生でしたが、阿部先生は、必要なときは支部のため金を出しても口は出さず、幹事長としては大いに助かったという思いが残っております。

2. 私が幹事長をしていた頃、幹事長の主な仕事は、年に一回開催される定期総会を取り仕切ることでしたが、中央大学本部の役員の招聘をはじめ、幹事会の招集、定期総会の案内などは私の事務所の事務員を使ってほとんど一人で行っておりました。昭和57年には手書きの会員名簿を作成しましたが、当時の支部会員の総数は約500名でした。このうち、例年総会に出席されるのは60名ないし80名といったところでした。

定期総会以外の幹事長の仕事としては、中央大学のサッカー部や剣道部が秋田県内で夏季合宿をやったときの激励訪問、大学主催の父母懇談会、学術講演会等への協力でした。

3. 中央大学は、昭和60年に創立百周年を迎え、同年11月13日記念式典と祝賀

パーティーが新装なった多摩校舎で行われました。

私が大学で学んだ当時(昭和35年入学～同39年卒業)の校舎は神田駿ヶ台にあり、狭少で校内はいつも学生であふれており、多摩校舎とは雲泥の差がありました。活気に満ちていたような気がします。

創立百周年記念事業資金の募金については、昭和56年に募金委員会規定が作られ、募金目標額は50億円ということで、会員の皆様には多大なご負担をお願いし、ご協力いただいたことについては、いまでも深く感謝いたしております。

秋田県支部元幹事長・現理事 田口 昭一 (昭和43年卒)

1. 藤林弘一幹事長の後を引き継ぎ、平成5年7月から平成10年6月までの5年間、中央大学学生会秋田県支部の幹事長をやらせて戴きました。

この間、「金野和子様、伏見晃一様、加賀谷殷様」の3人の支部長のご指導の下、何とか幹事長職を全うすることが出来ました。

この5年間は、秋田県支部の更なる発展の為に、組織固めに重点が置かれた時期でした。

(1) 規約改正、(2) 支部運営費の財源捻出方法の模索、(3) 会員名簿の発行、(4) 秋田県支部内の地域、職域における白門会創設への助力、(5) 大学よりの寄付要請に対する対応 等々…。

これらの中でも、特に思い出に残るのは、「大学よりの寄付要請に対する対応と、支部運営費の捻出対策」でした。

2. 金野支部長時代の平成5年、中央大学が「大学教育研究振興資金として金22億円の寄付」を募ることとなり、秋田県支部には、金100万円以上の寄付要請がありました。これに対応する為、金野支部長を中心に、理事一同頭を悩ませたものでした。

個々人に要請書を出したとしても、なかなか成果は上がらないし…。

理事会でも喧喧諤諤論議しました。

今後も、いろいろな形で寄付要請があることが想定されるので、これに対応するには、「秋田県支部の中に小単位の組織を作って貰い、そこに目標額を割り振りして、寄付に協力して戴くのがベターではないか」との結論に達しました。

そこで、既存の白門会(秋田県支部内の小組織は白門会と称して下さいとの学

員会の要請による。)の他に、秋田県在住の学员がどこかの白門会に所属しよう、白門会作りに、奔走することになりました。

金野支部長の方針を引き継いだ、「行動派の伏見支部長」の力を得て、地域を中心に、数ヶ所に白門会を作って貰うことが出来ました。

その結果、現在12白門会(大館・北鹿、能代・山本、男鹿・南秋、秋田県南、由利・本荘、その他職域白門会等)が存在しています。このように、白門会作りによって、寄付への対応が、今までより容易になったことはもちろんですが、何よりも学员同志の交流が盛んになったことが一番の収穫であったと思います。

3. 又、何と言っても大事なのは、秋田県支部の運営費をいかに捻出するか、ということでした。

「(1) 総会毎に参加者より金1000円ずつ集める(2) 会費制にする。」等々いろいろな意見がありました。

そこで、「事務の繁雑さの回避と、毎年一定の金額を集められること」をベースに、理事会で十分に時間をかけて、検討がなされました。

その結果、金野支部長時代の平成5年より、「支部長・副支部長・理事・会計監事・幹事長」(当時の役員は30数名でした。)から、毎年各1万円ずつ、「役員会費」という名目で、拠出して戴くことにより、中央大学学生会秋田県支部の運営費とすることが出来ました。

現在、理事数は、当時よりもかなり増えていますので、充実した秋田県支部の運営がなされていることに喜びを感じている次第です。

秋田県支部前幹事長・現理事 加藤 伸一 (昭和48年卒)

中央大学という絆

昭和44年4月、大学ロックアウトのまま、入学させて頂きました。

3月の剣道部入部合宿に同郷で秋田高校出身の佐々木了三君と入ったのが始まりでした。そこで人生の師、恩師高木友之助先生(当時剣道部部長)に出会いました。剣道部部長と剣道部員とのつながりで、又総長、学長と学員会会員とのつながりの中で多くの事を学ばせて頂きました。高木先生の教えの中に必ず出てくる言葉があります。1.自分の欲望を抑えなさい。2.相手の気持を思いやりなさい。3.自分の良心に照らし合わせ、正しいと信じたら断固それを貫きなさい。4.未来に向けて新しいものを創造する意欲を持ちなさい。5.健康に心を配りなさい。等々の教えであります。そして「中央大学という絆で結ばれた多くの師友が、いつでも心の門を開きます」と結びとしたものであります。四年間の剣道部生活では、各合宿そして各試合を経験させて頂き、4年最後の年が秋田合宿でした。地元郷里合宿に向けて北陸遠征を経て「うまくいくかな？」という不安の中で秋田入りした時の事が、今でも思い出されます。高木先生がご来秋され旧秋田空港へ迎えに行きましたところ、「加藤まず自宅に案内しなさい」と言われ、自宅への道すがら「秋田の町は海山川全てがそろっているネ」と言われた言葉を思い出しました。先生の中国古典の教えを秋田という町を見て感じとつての言葉なのではないかと今思っている次第です。

「より故郷を愛しなさい」と言う思いである事を、今痛切に感じています。

昭和53年に秋田に帰ってから、伊藤信雄先輩にすすめられながら学員会秋田県支部へ入会させて頂きました。

幹事・常任幹事と仕事をさせて頂き、平成10年には田口幹事長の後の4年間、加賀谷支部長、小畑支部長の下で、幹事長をさせて頂きました。平成11年の支部総会では「総長・学長講演会」と表し、高木先生にご来秋頂き、「大学の実体とこれからの中央大学が目指すもの」をご講演頂きました。市ヶ谷校舎の買収、八王子キャンパスの整備、ロースクールの開設等、そして阿部理事長先生の事についてもふれられ、この年5月に理事長にお願いしたことも話されました。阿部理事長先生と秋田県支部はその後太い絆で結ばれ、先生の心暖まるご好意は高木先生が結びつないでくれたものではないかと感じています。

平成12年2月10日、享年76歳にて、「さあ、諸君別れの時が迫りました。旅の衣をしっかりと整え、若者らしく、胸を張り、眉を挙げて、一步一步力強く、校門を後にして下さい。』『愛山喜雨』を残して恩師高木友之助先生は他界されました。

今55歳を迎えるに当たり、先生の教えを新たなる気持で学びながら、少しでも学員会活動をお手伝いし、高木先生の教えを多くの愛する後輩に伝えていく事が、私のこれからの仕事ではないかと考えています。

中央大学という絆で結ばれて、お世話になり教えて頂いた尊敬してやまない多くの先輩に、心から感謝しながら心の思うがままに文をつづりました。

学友会文化連盟音楽研究会
吹奏楽部

三神 俊雄 (平成16年卒)

中央大学学員会秋田県支部創立100周年おめでとうございます。また昨年の中央大学学友会文化連盟音楽研究会吹奏楽部秋田公演(2003年7月19日)開催のために多大なるご尽力を賜り誠にありがとうございました。

私は学生時代、といっても今年の3月まで学生でしたが、中央大学吹奏楽部という団体に所属しておりました。中央大学吹奏楽部は①中央大学の名を全国に広める。②吹奏楽という音楽ジャンルの発展に寄与するという目的のもと、毎年国内外の各地で演奏会を開催することを伝統としてきております。私はその演奏会の企画担当で、2003年度の演奏会の開催地をその文化的なレベルの高さなどを考慮し秋田県秋田市と新潟県新潟市に決定いたしました。

秋田公演の企画を携えて私が、吹奏楽部の秋田公演へのご協力をお願いするために学員会秋田県支部の皆様と初めてお会いしたのは、昨年の3月でした。

今、その当時のことを振り返りますと、突然学員会の会合にお邪魔し、ご挨拶も早々に演奏会開催のためにご援助をお願いするなどして、いくら学生とはいえかなり身勝手でありました。それにもかかわらず、秋田県学員会の先輩方は、私どもの公演企画書に目を通してくださり、私どもに厳しくも温かいご指導・ご助言をくださいました。ご指導のおかげで演奏会開催へ向け着々と準備が進み、また、演奏会の広報活動と演奏会パンフレットへの広告掲載では学員の皆様の並々ならぬご支援・ご協力を賜りました。演奏会当日、演奏会場の秋田県民会館大ホールには多くの先輩方にお集まりいただき、また先輩方の広報活動のおかげでお客様も多数ご来場いただき秋田県での公演は大成功のうちに幕を閉じることができました。

演奏会の準備をさせていただく過程で、

私は秋田県支部の皆様のご協力にただただ感激するばかりでした。中央大学の先輩・後輩というだけの繋がりしかない私どもに、惜しみのないご支援をくださる皆様の温かいお気持ちが本当に嬉しかったからです。私はこの温かい気持ちを忘れることなく、いつか何かの形で現役の学生へ「中央大学の伝統」として伝えることが出来たらと思っています。

最後になりましたが、中央大学学員会秋田県支部のますますのご発展と、先輩方のご多幸をご祈念申し上げます。





2003年度演奏旅行 中央大学音楽研究会吹奏楽部
秋田県民会館 2003年7月19日(上・下)